

# 京都とオデーサ——階段の上の雲と階段の下の苦悶

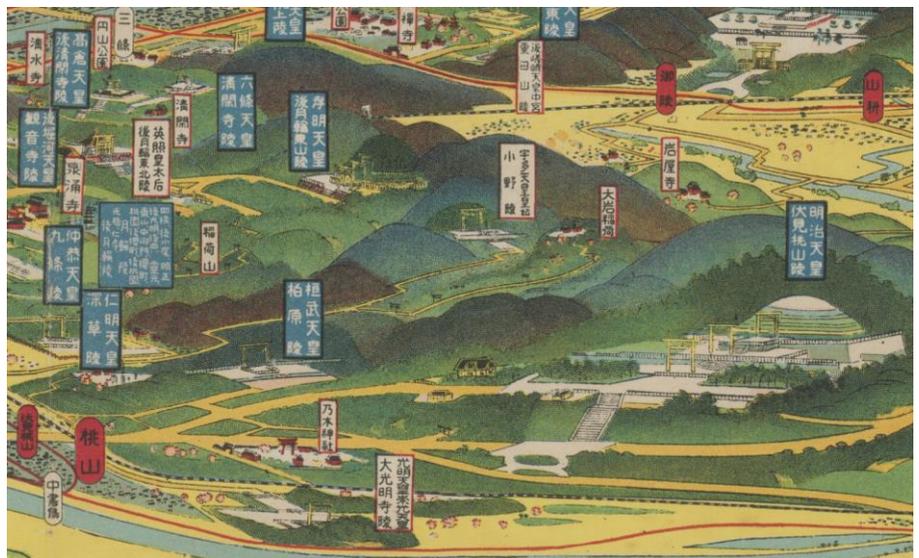
吉田英生 (S53/1978卒)

「地球の歩き方:ロシア ベラルーシ ウクライナ モルドヴァ コーカサスの国々」(2020~2121)で、ウクライナには全体の約1割50ページが割り当てられています。その中でハッと目を引いたのが“黒海の真珠”オデーサの大きな階段でした。その瞬間、筆者は京都の大きな階段も連想しました。それで興味をおぼえて調べてみたところ、両者は実に対照的な存在に思えてきたのでご紹介します。

## 1. 京都桃山御陵の階段



桃山御陵の階段  
(2019年1月筆者撮影)



吉田初三郎「歴代御陵巡拝圖繪」大阪毎日新聞社(1928、昭和3)  
<https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/detail/001937366.html> より

京都で大きな階段というと、1997年にできたJR京都駅の伊勢丹側の171段（高低差35m）を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、しかし、なんととっても圧倒的な威容を誇るのは、伏見の桃山御陵にある230段（正確な高低差は分かりませんが1段20cm近くとすれば40m以上）の階段ではないでしょうか。

1912年に崩御した明治天皇の墓である桃山御陵については、橋爪紳也 監修・解説「明治天皇大喪儀写真」(新潮社、2012)や藤井利章「天皇と御陵を知る事典」(日本文芸社、1990)などに詳しく、ここでは後者から引用します。

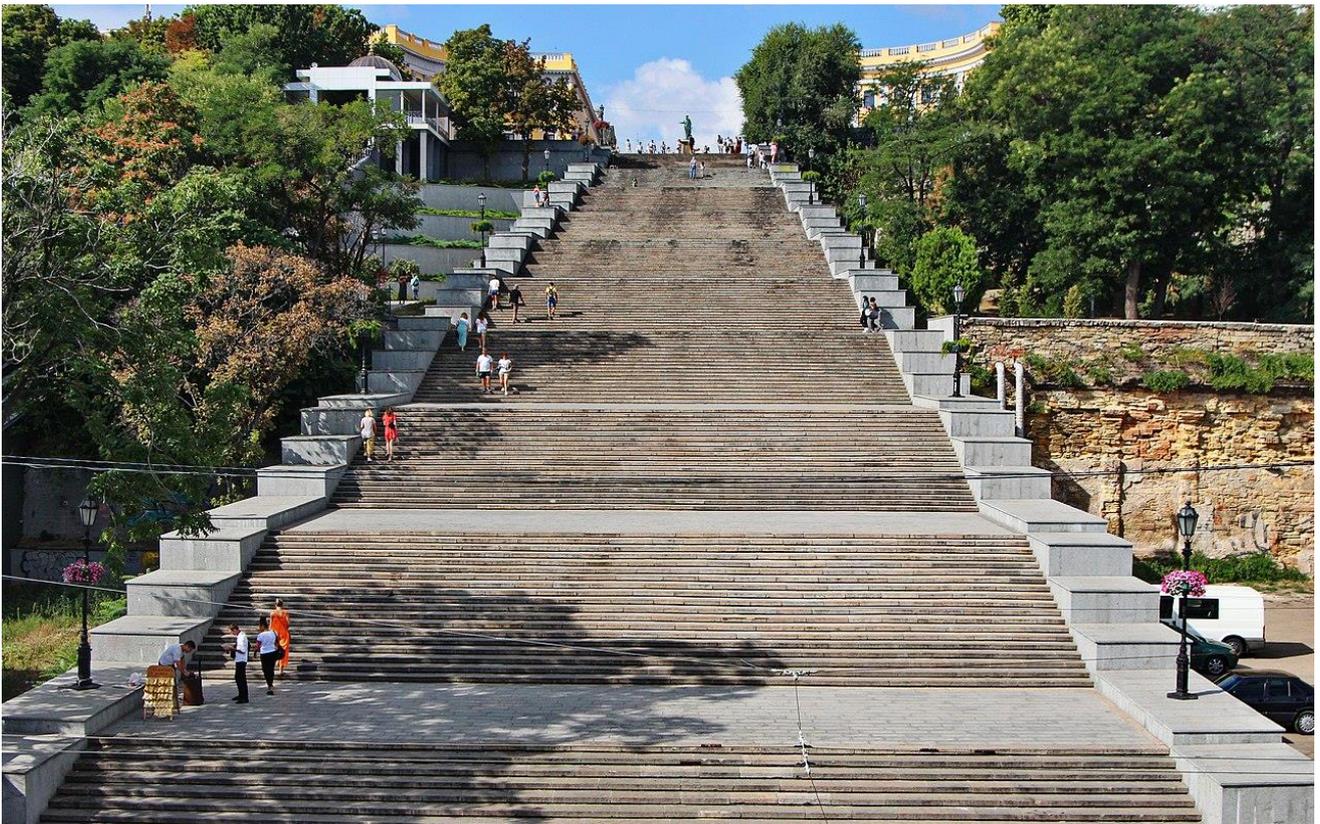
(明治天皇は)明治四五年七月一九日病に倒れ、七月三〇日未明、崩御された。御年六一歳であった。八月一日、勅旨を奉じて載仁親王が東京より古城山の陵地を検分、三日に祭官が任命され、五日に親王が帰京、報告され、六日に陵所を京都府紀伊郡堀内村大字堀内宇古城山(京都市伏見区桃山町)に定められた。陵所は遺詔に従って定められたという。一三日、靈柩を宮城正殿の殯(もがり)の宮に移し、一九日には陵所の地鎮祭を実施し、二七日に明治天皇と追号された。九月一三日に御葬送、朝権殿に靈代奉安の殿が行なわれた。午後八時に轎車(じしゃ)が宮城を出発、一〇時より青山葬場殿において御祭儀があり、靈柩は一四日午前二時に青山駅を出発、午後五時一〇分に桃山駅に到着した。そして、靈柩を葱華輦(そうかれん)に載せて御陵所に遷し、宝壙(こう)に納められた。奉葬の儀は一五日早朝に及んだという。この日、伏見桃山陵と陵号が定められた。

地鎮祭から一ヶ月も経たないうちに完成というものすごい突貫工事だったようですので、階段は奉葬の儀には間に合わなかったのではないかと想像しますが、上記の勢いの延長で埋葬後ほどなくして増設されたものであることは間違いありません（16年後の吉田初三郎による絵にも、当然描かれています）。

明治天皇の崩御は当時の日本国民にとって悲しい出来事といえますが、日清戦争(1894-5)・日露戦争(1904-5)に勝利をおさめ、司馬遼太郎の「坂の上の雲」の言葉にも象徴された明治の勢いが、この立派な御陵と大階段にも反映されているような気がします。筆者が前ページの写真を撮ったときも階段の上には青空を背景に雲が見えました。

(余談ながら多くの方がご存じとは思いますが、京都帝国大学は、1895年文部大臣だった西園寺公望の提案により日清戦争で得た賠償金を基に旧制第三高等学校を昇格させて誕生しました。平安京遷都が794年、遷都1100年の1895年に平安神宮、1897年に京都帝国大学、遷都1200年で1997年に現在の京都駅など、われわれには世紀末?90年代になにかと記念行事が続きます。)

## 2. オデーサ（リシュリュー、プリモルスキー、通称ポチョムキン）の階段



[https://uk.wikipedia.org/wiki/Потьомкінські\\_сходи#/media/Файл:Потьомкінські\\_сходи\\_11.jpg](https://uk.wikipedia.org/wiki/Потьомкінські_сходи#/media/Файл:Потьомкінські_сходи_11.jpg) より

一方、「地球の歩き方」で筆者が思わず息を呑んだオデーサの大階段は、1841年に、海の方角からオデーサ市街地への玄関となるような「怪物のような階段」として建設されたそうです。192段で高低差は27m(1段は14cm)と桃山御陵の階段



には及びませんが、奥行は142mで、幅は下部の21.7mから上部の12.5mに変化するため、下から見上げると遠近感がより強調されるそうです。

この階段が、とりわけ「ポチョムキンの階段」と呼ばれて有名なのは、1905年から1907年にかけてのロシア第一革命の最中、1905年6月14日に端を発する出来事に由来します。（この日付は当時のユリウス暦でのもので、現代のグレゴリオ暦では6月27日。なお、直前の5月27-28日、ロシア帝国海軍のバルチック艦隊は、日本海海戦で東郷平八郎率いる戦艦「三笠」の艦隊に破れたところでした。）当時オデーサの南東側のテンドラ港に投錨していたロシア帝国海軍の旗艦「ポチョムキン」で、ウジ虫が入ったボルシチが昼食で出されたことをきっかけに多数の水平らが少数の士官に対して蜂起する「戦艦ポチョムキンの反乱」が起こって水兵らが指揮権を掌握しました。そして戦艦は同日夕刻にはオデーサに到着し、水兵たちは帝政に対して不満を持ちゼネスト中のオデーサの労働者たちと合流し、大規模なデモ行進、さらに蜂起の指導者で銃殺されたヴァクレンチュークの葬儀を行いました。映画では、階段から艦隊に向かって喝采を送っていた市民らが、階段の上に集結した皇帝派の兵士から銃撃を受けて階段下の方に逃げ惑う悲惨な映像が6分ほど続き、なかでも赤ん坊を乗せた乳母車が階段を落ちていくなどの恐怖と苦悶に満ちたシーンが有名です。このことからオデーサの階段は「ポチョムキンの階段」とも呼ばれるようになりましたが、ウクライナ独立後に正式には元来の「プリモルスキーの階段」の呼称に戻ったそうです。

話が前後しましたが、映画「戦艦ポチョムキン」について説明を加えましょう。これは1925年、ロシア第一革命20周年記念委員会より依頼されたセルゲイ・エイゼンシュテイン(1898–1948)が制作したサイレント映画です。(ト書きのように短いセリフがときどき紙芝居のように表示されるだけです。なおオリジナルフィルムは、その後、政治的な理由でカットされ、かつ散逸したので、現在見ることのできるのは復元版です。筆者が見たのは1976年に復元されたショスタコーヴィチの音楽が背景に流れる版でした。) イギリスの海軍史家リチャード・ハフによる「戦艦ポチョムキンの反乱」(講談社学術文庫、2003、原著は1960)では、映画にほぼ対応する段階での惨劇が詳述されていて(pp.108–114)一連の事件で犠牲になった人数はオデーサの人口のほぼ1%にあたる6000人程度としています(p.142)が、寺畔彦「戦艦ポチョムキンの生涯 1900–1925」(現代書館、2013)では、諸説あるものの実際は50人程度と推測しています(p.100)。映画で創作された映像のインパクトがあまりにも強かったため、史実を離れて一人歩きした面は否定できないようです。なお、この映画自体は社会主義的プロパガンダの性格があるため、海外での公開に際して検閲の問題が多々あったそうですし、他にも史実とは異なる点もあって注意して鑑賞する必要があります。特に、映画はハッピーエンドとなっていますが、戦艦ポチョムキンと水兵たちのその後は決してハッピーではなかったことがハフの書からも分かります。

以上のように20世紀初頭には帝政に対する社会主義革命の一環で立ち上がったオデーサの市民が犠牲になり、その後もロシア革命に加え二度の世界大戦など悲愴な出来事が多々あったそうですが、21世紀の現在、ウクライナ・オデーサの人たちが社会主義革命の延長線上にあるロシアからの侵攻に立ち向かっているというのは、なんと皮肉で悲しい歴史の展開でしょうか。

付記 エイゼンシュテイン全集 第1部 人生におけるわが芸術第2巻「戦艦ポチョムキン」(キネマ旬報社、1974)には、映像採録シナリオが148ページ(1ページあたり6コマのシーンと文章)にわたって掲載されており、映画全編をたどることができます。また、山田和夫「戦艦ポチョムキン」(国民文庫、大月書店、1978)には完全採録台本も57ページにわたって掲載されており、映画を理解するのに大いに参考になります。